

立教大学学術推進特別重点資金 (立教 S F R)

在外研究

2011年度研究成果報告書

研究代表者	所属・職名		氏名	
	文学部・教授		坂倉裕治 印	
研究課題	アジアの近代化とルソーの受容：近代日本におけるルソーの教育思想の受容を読み直す			
研修期間	2010年9月12日～2011年12月16日(94日間)			
経費	年度経費	SFR助成額	所属学部からの補助額	合計
	2010年度	0円	0円	0円
	2011年度	594,380円	300,000円	894,380円
主な滞在国及び研究機関名	国名	研究機関名		
	フランス	パリ・ディドロ大学東洋言語文明学部		
研究成果の概要 (図・グラフは使用しないこと)				
<p>ある著作がどのように受容されたのかという問題は、とりわけ、それが産み落とされたのとは異なった言語や文化を持った社会や時代においてどのように受容されたのかという問題は、受け取る側を映し出す鏡となる。本研究は、日本におけるルソーの著作(とくに『エミール』)の受容がどのような特徴を有するのかを整理することで、アジアの近代化においてルソーの思想が果たした役割を検討しようとする国際的な共同研究に寄与することをめざすとともに、トルコ出身でフランスで活躍する社会学者 Nilüfer Göle (EHSS) が提唱する「複数の近代」論の立場から、日本の近代化をとらえなおそうと試みるものである。</p> <p>ルソーの著作が日本の近代化の過程で及ぼした広範な影響力については、これまでも多くが語られてきた。しかし、政治思想(中江兆民)や文学(島崎藤村、森鷗外)といった領域に比して、教育にかかわるルソーの思想の受容については、反省的な研究の蓄積が極めて乏しいように思われる。本研究では、さしあたり、明治・大正期の『エミール』の最初期の日本語訳3点、すなわち菅學應の抄訳(1897、1902年)、山口小太郎、島崎恒五郎の抄訳(1899年)、三浦關造の抄訳(1913年)を、その典拠や参照した書目などを可能な限り明らかにしたうえで、文献学的に検討する作業を通じて、日本の近代化のなかでルソーの思想がどのように読まれたのかを問い直すための、ひとつのてがかりを探ろうと試みる。</p> <p>西洋近代を唯一普遍的な模範とみなすのではなく、近代概念じたいに多様性を認めたいと、非西洋諸地域の近代化を、西洋近代を基準とした「欠落」、「不備」、「遅れ」といった評価のもとに整理していく思惟を批判したのが、Göle 氏の「複数の近代」論である。この立場に立って、思想や作品の受容をとらえなおそうとするとき、西洋の作品の自国語への翻訳紹介だけではなく、翻訳を必要とさせた条件、文化的社会的な背景、紹介のために活用し得た文化的な資源などへのめくばり、そして、なによりも、ほかのアジア諸国での同様の対象との比較が重要である。</p>				

研究成果の概要 (つづき)

2010 年秋、フランス国立学術研究センター (CNRS) 上席研究員の Tanguy L' Aminot 氏の呼びかけで、国際的共同研究グループ「アジアにおけるルソー」が結成された。参加する研究者の出身地は、フランス、イタリア、ロシア、日本、中国、韓国、ヴェトナム、カンボジア、インドネシアなどである。本研究は、このグループの参加者たちと密接な連絡をとりながら進められている。2011 年 12 月には、L' Aminot 氏が中心となってパリ・ソルボンヌ大学で開催されている研究者向けのルソー研究セミナーにおいて、『新教育』にあつて通俗化した『エミール』—三浦關造 (1883-1960) の日本語訳 (1913 年)を読む」と題する講演を行った。「アジアにおけるルソー」の参加者も多数来場し、建設的で有意義な質疑応答が長時間続いた。

パリ・ディドロ大学東洋言語文明学部中国学科には、『中国におけるルソー』(2010 年)の著者で「アジアにおけるルソー」の中心メンバーのひとりである Xiaoling Wang 氏が所属している。また、中国学科、日本学科、韓国学科、ヴェトナム学科を擁する同学部図書室は、当該諸国(地域)とフランスとの文化交流にかかわる資料を集中的に収集しており、とくにアジア諸地域の近代化とフランス思想の受容に関する未公刊の学位論文を参照できたのは貴重であった。パリ近郊のモンモランシにあるルソー記念館附属研究図書室では、『エミール』に関する最新の研究蓄積に触れることができ、とくに文学研究者による研究から、本研究において日本の初期翻訳を検討する際にも有効と思われる、テキストの構造に関する最新の分析を学ぶことができた。ジュネーヴのヴォルテール協会に移管された J.-J. ルソー協会の蔵書のなかには、19 世紀末から 20 世紀初頭の新新聞・雑誌掲載記事を言語別年代別に整理した冊子があり、本研究の対象である翻訳の訳者たちが参照しえた時期の英語、ドイツ語の記事を効率的に参照できた。

アジアの近代化とルソーの受容の諸相を国際的な共同研究によって明らかにしようとする試みは、始まったばかりであり、従来の研究にない新たな可能性を開くことが期待されている。しかし、当面はフランス語を作業言語としながら、各国の研究者たちの成果を共有するべく努めている段階であり、方法論上さらなる洗練が必要であることも自覚しなければならない。本研究は、2012 年度以降も継続して、さらに研究を深める予定である。

キーワード (研究内容を適確に表しているものを 5 項目で記入)

[ルソー] [『エミール』] [日本の近代化] [アジアの近代化] [受容]

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

③講演

« *Émile* vulgarisé au sein de « l'éducation nouvelle » : lire la traduction japonaise de MIURA Kanzo (1913) », conférence prononcée à l'Université Paris-Sorbonne, le 10 décembre 2011, dans le cadre du séminaire d'équipe de J.-J. Rousseau, dirigé par Tanguy L' Aminot (CNRS).